

2020年度理系チャレンジ講座（第7回）を実施しました

1月20日（水）に理工学部の柴田建先生を講師に迎え、「21世紀のアーバンデザイン：車の都市から人の街へ」というテーマで、理系チャレンジ講座の第7回を実施しました。遠隔配信した白杵、安心院、国東、竹田、三重総合、日田、別府翔青、大分鶴崎、大分西、中津南、大分雄城台と来学した大分東明の12校129名が受講しました。



先生は、今ある街をどうつくりかえるのが現在の課題であるとして、“車中心につくられてしまった都市を、もう一度人の街へ取り戻す”ということをテーマに講義されました。

20世紀初頭にアメリカは車の大量生産によって車社会へと移行し、20世紀は“車の時代”



と呼ばれるほど、車を中心とした文化へと変容していきました。日本でも現在の郊外エリアの景観をみると、大きな看板が目立ち、いわば車のためにデザインされたロードサイド店舗を中心とした街となり、都会も地方も郊外のロードサイドでは同じ景観を呈するようになったということでした。

その結果、1980年以降、地方のまちなかでは店

舗が減少し、街に空き空間が増えるということが起きてきます。しかし、2010年ごろからこうした空き店舗や空き家、空き地を利用したシェアオフィス、シェアカフェ、チャレンジコンテナという若者向けの店舗が増えてきています。さらに、地方への移住者も増えてきているということでした。

このような変化は、インターネットの普及で、画一的なロードサイドのお店より自分のスタイルに合う隠れ家的なお店を選ぶということが可能となり、車中心の街から人中心の街へという新しい流れが始まっているそうです。



最後に、先生はポストコロナのストリートデザインとして、人や自転車のために車から道を取り戻すことになるだろうといわれました。思いがけなくもコロナ禍の下、(道交法を見直して) 道にテーブルを持ち出したり、歩道を広げて、店の前の空きスペースにテーブルを置き、食事の場にしたりするといった動きがすでに広がりつつあるということでした。

授業後に実施したアンケートでは「総合的に判断して授業がよかった」(100%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ)、「教員は真剣に取り組んでいた」(100%)、「受講生は授業に意欲的に取り組んでいた」(99%)という結果でした。遠隔配信については、「音声はよく聞こえた」(96%)、「映像はよく見えた」(96%)という結果が出ました。